

近江カルストの村々 (圖版第二版付)

小 牧 實 繁

一、

彦根の東南多賀から東北東直線距離約四軒に杉の部落があり、杉から東直線距離約二・五軒に保月の部落があり、保月から東方直線距離約一・五軒に五僧の部落があり、それ等三部落が今犬上郡脇ヶ畑村を構成してゐるが、それ等は舊藩時代に於てはそれぞれ三つの村をなしてゐたのである。

近江國で高距五〇〇米以上に位置する聚落はさう數多くはないが、杉・保月・五僧共に高距五〇〇米を超え脇ヶ畑全村が五〇〇米以上に立地してゐることになるのであつて、近江の如き山の深くない高地の少い土地に於いては蓋し異數な事項として注意せられなければならないであらう。

而もそれ等の部落、舊藩時代の村々が全部カルスト臺地(2)の上に立地するといふことは單に此の國の郷土地理愛好家に止らず一般地理學徒の興味を唆らずには措かないのである。筆者もまた早くから此れ等村々の地理乃至はその生活に對して大なる好奇心を抱いたもの一人であつたが幸にして昨秋親しく此の地を實地踏査しその生活のあらましを明かにすることを得たのは大なる喜びであつた。即ち此の一篇を綴つて之を世の地理學愛好家に紹介する所以である。讀者幸に筆者が調査の粗

漏を咎むることなかれ。且秋十一月の候、自生楓また山の紅葉を賞しがてら身自ら詳しく調査の事に従はれんことを御勧めする。高原に乏しい吾が國に於いてその爽快味を満喫し得るの幸福をも感ぜられるであらうから。

一一、

「五萬分一地形圖」彦根東部」一圖幅を携行するものは多賀の東、杉坂の上から美濃境にかけて杉、保月、五僧の三村が存在することを極めて容易に知り得るであらう。また飛行機を以てかの鈴鹿を去來するものは、そのあらゆる局部的詳細をもつてこれ等三つの村々がこの臺地の上に布置せられてゐるのを俯瞰するであらう。吾々は近來餘りにも多く上から垂直に下瞰した地形圖や飛行寫眞やを見せられ過ぎて、却て下から上を仰ぎ眺めた景觀を輕視するが如き風潮に禍ひせられてはゐないだらうか。吾々は多くの場合に於いて平坦な地上に立つてゐるのではないか。飛行機上から地上を下瞰するが如きは寧ろ例外的な場合に限られるのである。

かかる見地から吾々は是非一度は平地に立つて下から素直に臺地上の村々を眺めて見る必要もあるのである。さうした考へから此處に示したのが第二版第一圖と全第二圖とである。前者は多賀の東方大岡の南方から杉部落の方面を望んだところであり、遠景の山の中央の低く窪んだ杉の木立の有る所が杉峠であるが杉の部落は全然見えない。(中景の聚落は大岡である)後者は杉の南方佐目の部落から脇ヶ畑村との境、高室山を望んだところで、此の山の向ふに杉や保月や五僧やの部落があ

る筈であるが、それ等も全然見えない。「この奥に眼あり」と言ふ人もあるが、此の際筆者は「此の上に村あり」と言ひ度いのである。

三、

杉坂(ツギ)といふ名もさうであるが、實際に多賀からでもそれとうなづける數本の亭々たる杉の大木が矗立する杉峠は更に魅惑的である。ところが八重練(ヤヘネ)からの道は心細い小徑で僅かに「是より杉坂十八丁ミのいせ道」と刻せられた自然石の道標によつて矢張りそれが杉坂道であることを知るのである。かまはずどんどんと急坂を攀ぢ登ると或る部分は美しい松の岩山をへつる相當な道になる。

女三人また二人それに一人の少年が杉から下つて來るのに會ふ。背板(セタ)を負ひ杖(ツツエ)を持つてゐる。少年は若干の薪(シバ)を持つて下る。何れも八重練まで米を負ひに行くのである。一人で一俵負ふと言ふ。山の斜面に杉材を出すため男が働いてゐるのが見られまた杉材の切られたものが認められる。杉坂を殆んど登り詰めた所に數百年を経た杉の古木があり徑畔に「多賀神木 杉拾參株 調宮所屬」と誌した石標が建つてゐる。坂を登り詰めた峠に救済道路建設作業に従つてゐる杉の人達の話しによれば、多賀の神さんが伊勢から來られた時此の杉峠で休まれ辨當を食べられた筈を地面にさされたものが成長したのが箸杉で、楊子をさされたものが成長したのが楊子杉である、多賀神はここから栗(クリ)の桂(ツギ)の木に飛ばれたのでその桂の木をトビノキと稱し多賀大社の奥の院となつてゐると言ふ。

救済道路は杉から杉峠を経て栗栖に通せんとするもので完成の曉には自動車を通ずるであらうと

言ふ。杉坂道が廢れるやうなことにもなるであらう。

杉には以前家が二十軒もあつたが今は十三軒に減じてゐる。(朝鮮人の一世帯が此所まで入込んでゐる) 田は殆んどなく(田は聚落の東方に僅かに認められるのみ) 米は一分しか穫れず大部分を八重練から買ふ。耕地の殆んど全部を占める畑には茶や蕎麥や桑や牛蒡や大根やが作られてゐる。野菜で

第一圖



杉部落と野菜畑

は大根・牛蒡の外に菠薐草ハウレンサウなども作られ七月から十月にかけて京都の中央市場まで出されるといふが、大根・牛蒡が殊に此の地の名物で、正月に用ひられる御多賀牛蒡は昔からその名高く、それはみんな此の村の畑から産するのである。土地に石氣イシケがあると牛蒡は又またになつて駄目なのであるが此の土地は土壤が深く牛蒡によいと村の人達は言ふ。その他、畑には白菜や球白菜や杓子菜や蕪菁やが作られたまた胡麻の代りとして用ひられ荏エの油をとる荏エ胡麻なども作られる。第一圖はドリネの中の杉の部落とその野菜畑とを示す。圖中には白菜・球白菜・杓子菜・蕪菁・牛蒡・大根・蕎麥・桑が見られる。養蠶は夏蠶が一度飼はれるだけである。

山では炭を焼きまた割木や杉皮を若干出す。炭は村持

の山の木を在來竈で黒炭クロズミを燒き背板で負つて多賀彦根方面に出すのである。(割木も同様である)杉から保月への里道の路傍にさへ炭燒竈は認められ、又勿論山の中腹にも谷底にも見られる。炭燒き男の話によれば、一竈大抵百貫乃至百十貫を燒くが雜木を切つてから七日、これを竈に入れてから五日かかる。さうして燒けた黒炭を六貫乃至八貫俵として負つて出て多賀で一貫二十五錢位で賣る。

杉から保月への道路の傍に一つの炭燒竈がありその炭燒男は河内(隣村芹谷村)から來て燒いてゐると言つたから、此所でも矢張り杉の山で杉の人達のみが炭を燒くとは限らないことが知れる。此の場合此の男は毎日河内から登つて來て毎晩炭を負つて歸り、それを河内から多賀方面に出すのである。

杉と保月との間にはまた杉を倒して杉皮を剥いだのや石油發動機製材で杉の丸太を板や柱や極木やに挽いたのやが見られる。實際此所から杉材を丸太のまままで搬出することは不可能なのである。杉坂の急坂があるから。

勞働にはマフヂで作つたハバキを用ひる。マフヂ製のハバキは乾いてゐる時は非常に強い。雪時には藁製のハバキをはきカンジキを着ける。また冬はマンリキを着ける。三星の鐵を着けたもので、これをはけば鏡のやうに光つた氷の上でも炭など負つて出ることが出来るといふ。携帶品を入れたりするテゴもありまた辨當は辨當フゴに入れる。

山稼ぎが相當多い譯であるが山の神はなく唯氏神社春日神社があるばかりである。寺は眞宗西

本願寺派光明寺。

尙、此の村には昔は鹿が多くゐたが今はなくなつた、また猪は近年餘り出なかつたが昨年あたりから相當出て畑の大根とか薩摩芋とかを食つて困るといふ。併し猪垣は見られない。

錦木ニシキキの自生したものと楓の紅葉更にはまた山の紅葉を賞しながらなほ行くと保月ホツキも近いらしくまた畑が現れて杓子菜や牛蒡や豆・甘藷・里芋・蕎麥・麥・桑などが作られてゐるのを見る。畑には農具小屋のあるものもあるが餘り多くはない。そして畑に薄がぼうぼうと生じてゐるのを見るとたださへ困難な村の荒廢を察することができるのである。併しながら、熊笹の原・雑木の紅葉・杉の樹立・粗らかな松といつた風物に取圍まれた平斜面の畑は一種特別な風景を展開する。吾々は平凡なものやうなこの高原的風景に一種の魅力を感じてゐる。カルストと言つても植物は寧ろ豊富である。杉さへあるのである。カルストに杉を見る日本は雨が多いのだなと思ふ。

保月の部落の入口には杉の大木が四本もあり、而してその下に地藏堂がある。村らしい村といふ感じを與へるのであるが、一たび村中に入つてその荒れ衰へた姿を眺めるとき愛郷家の心は暗くならざるを得ない。

保月(c)には百年以前には家が百三十軒もあつたが次いで百軒、次いで八十五軒、次いで七十三軒となり今では戸籍面では六十軒あることになつてゐるが實際は五十軒くらゐしかなくなつてゐる。以前は田も若干はあつたが今は田も全然なく畑作しか行はれない。畑には麥・蕎麥・牛蒡・大根・赤大根・杓子菜・葱・甘藷・里芋・人蔘・大豆・小豆などが作られ大豆・小豆・牛蒡などは若干は多賀

彦根方面に出る。養蠶は夏蠶が主で春蠶は殆んど飼はず、間に原蠶をやり彦根方面に出すのみである。

山稼ぎは炭焼と木挽とである。以前は割木も若干は出したが今は出さない。山は個人持と村持とありその木を在來式の竈で黒炭クロコに焼きそれを六貫乃至八貫俵にして杉坂經由、彦根・京都方面に出るのである。背板で負つて出て、歸りに八重練から米を負つて上るのである。

水が少いか水は大部大切にしてゐるやうで共同の栓を有する水道を用ひてゐる。僅かな谷水を集めるのであらう。

氏神は杉・五僧にも見られぬ立派な杉の大木を有つ村社八幡神社で祭は舊三月十五日と舊九月十三日とである。以前は多賀から神主が來たが今は學校の校長さんが神主を勤める。(此處にも村の疲弊が讀まれる。)太鼓を出し、のほりを立て、餅をつき、仕事を休むだけの祭である。山の稼ぎは多いが山の神としてはない。山の神の神木も祠も共になく、唯、舊十一月三日に餅をつき(杵にて)氏神に上げ寄り合ひをするのが山の講のやうにも思へるがこれは夷講エビス講といつてゐる。野神もない。寺は西木願寺派の照西寺で、その報恩講などには單に老人のみならず村の中年の男なども擧つて參詣するといふ信心深さである。併し一眞宗僧侶の説教が果してよく一村の荒廢を救済し得るであらうか。また村人達は果してそれによつて安心立命の境地に達し得るであらうか。

尙ほ若干民俗的な記述が許されるならば、保月の八幡神社では昔年々の祭に順番に人身御供を上げたと言ひ傳へられてゐる。ところがそれは實は狸に食はれてゐたもので、或る年の祭に狸が人を

食つた揚句「平田のめけんがをらなよかろ」と言ひながら踊り出したので人々平田に行つてめけんを尋ね求めたところ、それは犬であつた、そこでその犬を借り箱に容れて背負つて歸つて來ると狸は既に保月の地藏との間のなぶり石まで逃れて居て坊主に化けて「平田のめけんがこはもんこはもん」と言つたので犬が飛びかかり食ひついた處それは大きな古狸であつた、そしてそれから人身御供も止んだといふのである。この入幡神社は南宮の分れであると言はれてゐる。

尙、参考のため記す。土地の人の話しによれば保月では五僧よりも霜が多くまた寒さも着物一枚だけ違ふといふ。(高度の差は一〇〇米ばかりである)

鍋尻山(カ)を左に眺めて更に奥深く紅葉の山をわけ入ると五僧ゴソウに出る。

五僧(ゴ)には家が十一軒ある。昔から十一軒で増減がない。昔隠れ人たる五人の僧が來て開いた故に五僧といふと言はれてゐる。書きものはない。むかしは木地屋の運上まで取りに行けた書きものがあつたのであるが庄屋横目の火事で焼けたと言ふ。木地屋はなかつたやうである。村の歴史は兎も角として近年家の減ずるやうなことはない。保月では家の長男からして他に出るので今は五十軒といふが實際は四十二、三軒になつてゐるのであるが(杉では餘り他へ出ない、大工などになつて他へ出るものもあるが出稼ぎでまた歸つて來るものが多い)五僧では長男が外へ出る如きことはな
ら。

畑と山とで食つてゐるのであつて田は全然存在しない。畑には牛蒡・大根・蕪菁・大豆・甘藷・里芋・麥・蕎麥・桑(老桑が多い)などが作られる。それは相當高い所の斜面にまで段々に作られた

畑である。尤もそれは水平ではなく石垣はあるが畑自身が多少の傾斜を有するものである。作物は大部分が自家用で、牛蒡は若干個人賣りで美濃時山の方へ賣るが他は殆んど賣ることがない。米は主として美濃養老郡の方から買ふ。此の村では養蠶もやるが最近十年間は原蠶の飼育に傾注してゐる。蠶の病毒が少いのでそれに適してゐると言ふ。

山は炭焼が主である。キヤキ(ケヤキ)・モミヂ・シナガハ・ハウソ・ウリノキ・クルビ・クリ・カハダチ・シデノキ(カシノキは少ない)などの雑木を個人持山、村持山から切り(村持山は誰でも入り得る)これを黒炭に焼き、八貫俵にして多賀方面に出すのである。(歸りに米一俵づゝ負ひ來る)竈は昭和八年から清スミ式で、一竈百五六十貫焼けるが、詰めるに一日、焼くに一日、八、九人手間を要すると言ふ。山には木はあるが割木や薪は市場までの距離が遠くて引合はない。

先づ五僧では炭を多賀方面に賣り米を養老及び一部は多賀方面から買ひ、畑で野菜などを作つて食つてゐると言へる。勿論、樫の實を乾したのを炒つて食つたり、五僧から大君ケ畑へ出る谷の自然薯を掘つて食つたりもすることは言ふまでもないが。

人々普通の勞働にはハカマを着ける。(大君ケ畑・佐目ではカルサンと言ふ。併し實を言へばカルサンは短く膝までのものであり、ハカマは長く足頸まで達するものである。またハカマをカルサンと呼んでゐる人達も居る)これは布を多賀方面から買つて自家で作る。少しきつい勞働になると脛にハバキを着ける。ハバキはマフヂで冬仕事に作る。詳しく言へば、縦はマフヂの心の實をとりツチ、ハコで打つて苧のやうにしたものを裂いてアマカハのアミノで編むのである。古風な人達は尙ほ

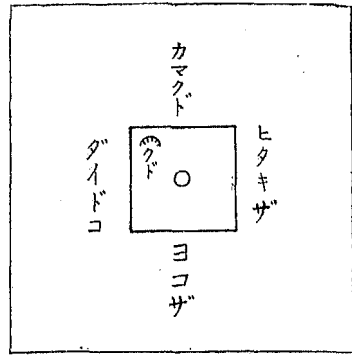
足にカフ、カケを着ける。雪時には足袋を用ひず藁で足袋形に作つたツマカケをはきカフカケを用ふれば一層温いと言ひ(ハバキは勿論つける)その下にワラデをはき、更に雪の深い時にはカンジキを着ける。カンジキは樫の木などを曲げ繩を二段にかけた式のものである。地面の凍つた時にはワラデの裏にマンリキを着ける。因みに雪で山行きのならぬ時など家の近くで穿くものにワラグツがある。膝まである長い靴である。以上の雪具は杉・保月でも用ひられ、またワラグツは以前は多賀・入重練邊にも行はれたが今は見られなくなつた。

運搬具の最も重要なものは背板である。昔は負繩(オシタ)であつたが随分と以前、七十年も百年も以前から背板が行はれるやうになつたのである。現に或る家(例へば西村治與氏宅)では使用はせぬが負繩を保存してゐる。繩の三つ組のものである。また大君ケ畑では現に負繩を用ひてゐる。(男は擔(ニテ)ひ棒(ボツ)を用ひる)一寸した携帯品を入れたりするには腰ツケ(イシメ)やテゴを用ひる。(大瀧村ではテゴのとをイテコと稱する)

此の村では上にも言つた如く、最近十年間は毎年六月から九月にかけて原蠶を飼育して來たので六月から九月にかけては炭焼は行はず、炭は九月から焼く。ところが昔から伊吹に三遍來れば此所へも來ると言はれてゐる雪が十一月末にはやつて來て普通二三尺は積る、昭和九年には五、六尺積つた。さうすると山は休みで冬は炭を運んだりハバキその他の日用品を作つたりなどするくらゐで三月一杯までは遊びである。さうしてユルリの周圍の生活が始められるのである。

ユルリの上にはツシからア、マが下り、真ん中のカナゴの上にはチャガマがかけられ、尙ほ爐の一

第二圖



理であると五僧の人は言ふのである。

美濃からは米を買ふといふのであるから時山あたりとは若干の經濟的關係がある譯であるが、美濃と五僧との通婚は見られない。(併し時山から京都の植物園附近に八年も出てゐて大君ヶ畑に嫁入つて來たといふほやほやの若嫁にも會つたから、美濃と五僧との間に通婚がないのは單なる偶然であると思はれる) 脇ヶ畑村内との通婚は勿論あつて五僧が特殊な位置を保持してゐるとは思へなう。

山の稼ぎは多いのであるが山の神はない。芹谷村には山の神があると言ふが脇ヶ畑村にはない。野神もない。氏神湊神社があるのみである。その氏神も建物は小さく且新らしくその森にも古木と

隅に小さなクドが作られてゐる。家長の座はヨコザと呼ばれ、その向つて右側がヒタキサ、正面がカマクト、向つて左がグイドコである。(第二圖參照) このユルリは杉・保月・五僧は勿論、美濃の時山、隣村の芹谷村・大瀧村などに亘つて見られるものであるが、唯、美濃の方では客は滅多にヨコザには座らせないので對して此處江州ではヨコザにも客を上らせ、客が來れば亭主は滅多にヨコザには上らないのである。昔は八重練邊にもイルリはあつたが薪が不足になつたので今はなくなつた、話しが、クドでならば薪一貫で米一升炊けるものをユルリでは十貫の薪を熾さなければ一升の米が炊けぬ

いふ程のものがない。五人の僧がこの村を開いたといふから始めは氏神もなかつたのが後に勧請せられたものではあるまいか。元來は水大明神と呼ばれ水神を祭つたものであるが今湊神社といふのであると言ふ。舊九月十六日が祭で以前は多賀から神主が來たが今は學校の校長が神主を勤める。新四月二十二日多賀祭と同日に春の祭がある。

墓地はあるが寺はない。檀那寺はずつと離れた豊鄉村にあり、東本願寺派である。何でも五僧は京の門徒であつたのであるが、教如が伊勢から京に行く時、豊郷シジク院ユーン寺に憩つたことがありその返禮として五僧を檀家としてその寺に與へたものであると言ひ傳へてゐる。何れにしても寺が餘りに遠いので子供の死んだやうな場合には略式に隣國美濃の時山の寺へ頼んで葬式を濟ますといふのである。五僧を僻遠山村の一例に數へ入れることは許されるであらう。併し五僧越による五僧と美濃との間の交渉は案外容易であるのかも知れない。筆者は未だ實地を踏査してゐないので此の問題に就いてはなほ將來の研究に俟ち度い。

尙、この村には猪は少いと言ふが、併し時山から上つて來た獵師に案内せられて五僧から大君ヶ畑へ向つた時には谷の中の路傍にすら猪の地面を荒した跡を見たのであるから猪がゐないとは言へぬと思ふ。里には猪に荒される程のものがないのかも知れない。

最後に鍋尻山に關する五僧の言ひ傳へを録して置く。鍋尻山の頂上には雨乞壺といふのがあつて四時水を湛へ天旱するも澗せず人々此處に雨乞ひをする、若し手を以てこれをいぢれば忽ち大暴風を起すと言ふ。

註

① 小牧實繁、日本に於ける聚落の高距離度、地理論叢、第一輯、昭和七年、一二八頁参照のこと。

② 近江のカルストに就いては、新帝國太郎、近江のカルスト、地學雜誌、第三十年、第三百五十四號、第三百五十五號、大正七年、三七一頁以下参照のこと。

③ 湖路銘誌に
杉坂 犬上郡多賀奥ニ有
とある。

④ 湖路銘誌に

栗栖 犬上郡在、此所因縁アリ、多賀祭禮下ニ記ス、此處公用所役御免許也

とあり、多賀祭禮に就いては、多賀大明神の條に
四月二ノ午日大祭有、此日同郡栗栖村ニ社アツテ多賀明神
御輿休所奉ニ栗供御、其節禰宜神主其外役人等毎手ニ山麓飛
木ノ枝ヲ腰ニ指テ祭渡ル也
とあり、

近江輿地志略卷七十五、犬上郡第二に

栗栖村 八重練村の北にある村なり、畑なり。 栗栖社

栗栖村に在り。多賀の末社也、調宮といふ是也。多賀本社
より卯の方一里にあり、社南向、鳥居なし、此社は多賀神
輿御幸の假殿也、祭禮毎年四月二の午日

とあり、

近江カルストの村々

近江名木誌、大正二年、二八頁に

箸ノ杉、周圍二十六尺、樹高十三間、樹齡千年、久徳村大
字栗栖字杉坂、天照大御神此地ニ降臨アリ杉ノ御箸ニテ晝
餐ヲ召サセ給ヒ食後之ヲ捨テサセラレシモノ根ヲ生ジテ此
大樹ヲナセリト傳説ス
とある。

⑤ 近江輿地志略卷之七十五、犬上郡第二に

杉村 桃原村の東北(小牧註、東南の誤ならん)にある村な
り、畑なり
とある。

⑥ 近江輿地志略卷之七十五、犬上郡第二に

保月村 河内村の南東にあたる村也。畑なり
とある。

⑦ 湖路銘誌に

保月山 鍋尻山共云
とあり、全書、多賀大明神の條に
山奥入穴有り、ナベシリ山也
とあり、更に全書に

鍋尻山 同郡(小牧註犬上郡)多賀河内風穴有木曾マテ通ル
ト云
とある。

⑧ 近江輿地志略卷之七十五、犬上郡第二に

五僧村 河内村の東(小牧註、正しくは東南)に當れる村な

り、畑なり
とある。

⑨ 近江輿地志略卷之四、道路に

鳥津越、或は五僧越ともいふ、五僧村より美濃國土岐多羅村に出づる間道也。それまで(小牧註慶長五年)は知る人な

かりしに鳥津(小牧註、鳥津兵庫頭義弘)初めて通路とせし
故に鳥津越とはいふ也。

とあり、全書卷七十五、犬上郡第二に
五僧越 美濃に越ゆる道なり
とある。

岐阜縣土岐口蛙目粘土に就いて

杉 山 精 一

- (一) 緒言 (二) 産地 (三) 採掘の沿革
- (四) 産地附近の地質 (五) 蛙目粘土の分布及産出状態
- (六) 採掘の現状 (七) 水簸方法 (八) 蛙目粘土の性質
- (九) 蛙目粘土と部落との關係

一、緒 言

近時日本の窯業は急速に發達し、陶磁器業の如きも長足の進歩發展を示し、品質の優良と價格の低廉と相俟つて海外輸出額著しく増加し、昭和八年度に於て三千五百六十三萬三千圓に上

り、其世界市場に最高位を占むる日も近き將來にあると期待せられる、而かも其輸出品の過半を占むるは我美濃焼で昭和八年度の生産額一千二百二十萬圓に達し益々隆盛に赴かんとする。

本邦に於ける陶磁器の原料にして古來その品質の優良を以て稱へられてゐるものには土岐口蛙目・山口蛙目等がある、而して土岐口蛙目粘